

習氏・国民党が敵失

松田康博・東京大教授

(中台関係論)



論点

蔡氏が圧勝し、立法委員選でも民進党が過半数を取った。2019年11月の香港区議選とも重なるが、今回の台湾での選挙も投票率が70%を超えている。これだけ投票率が上がり、差が開いたということは若い世代が投票している。多くの人々が中国への危機感を持ったということだと思う。

中国の習近平国家主席は、19年1月の台湾政策に関する強気の発言で、台湾の人々から不興を買った。6月以降に本格化した香港の問題は、台湾の人々に中国の「一国二制度」に対する警戒感をさらに強くさせた。

国民党の候補者の問題もある。韓国瑜氏は馬英九政権時代と同様に、「台中の経済交流を進めることで発展する」と訴えた。ただ、これは米

中関係の安定が前提だ。また対中姿勢が馬政権時代よりも弱腰な点も有権者を失望させた。

そういう意味では、今回の選挙は中国の習氏と、香港の林鄭月娥氏、それと国民党のオウンゴールとも言える。蔡氏と民進党は18年11月の地方選で完全に負けていたが、今回は彼ら自身の失点でこれだけの差がつく結果になった。

2期目となる蔡政権も安泰ではない。1期目では年金制度改革などを断行し支持率が急激に下がるのを経験した。蔡氏は対中政策など外交面では現状維持に努めながら、国内産業の構造改革や環太平洋パートナーシップ協定(TPP)をはじめとした対外貿易交渉など、内政・経済面を中心に取り組むことになるだろう。

11日投票の台湾総統選は、民進党の蔡総統が過去最多得票で再選を果たした。その意味や今後の見通しを識者に聞いた。